

令和 5 年 6 月 10 日現在

機関番号：34416

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21633

研究課題名（和文）外国語の知識が母語に関するメタ言語能力に与える影響についての理論的・実証的研究

研究課題名（英文）A theoretical and empirical study of the effect of knowledge of a foreign language on meta-linguistic awareness with respect to one's mother tongue

研究代表者

大津 由紀雄（Otsu, Yukio）

関西大学・外国語学部・客員教授

研究者番号：80100410

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、母語の知識、外国語の知識、母語に関するメタ言語能力、外国語に関するメタ言語能力を関連させて捉えるための認知モデルを構築した。新型コロナウイルス感染症の拡大により、学校を単位とした大規模な調査が行えなくなったため、このモデルの妥当性を検証するため、規模を縮小した調査を行い、外国語の学習において身につけた知識が母語に関するメタ言語能力の発達に正の影響を与える可能性があることが示唆された。

本研究は学校における英語教育、国語教育などにも重要な示唆を与え得るものであることから、小中高の教員グループとの定期的な会合を重ね、本研究の成果の社会的意義を明確にする努力を重ねてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語の学習において身につけた知識が母語に関するメタ言語能力の発達に正の影響を与えるか否かを理論的・実証的に探る試みはその重要性にもかかわらず体系的な研究はほとんど行われていなかった。また、母語に関するメタ言語能力と外国語に関するメタ言語能力が共通の認知機構に根ざすものであるかという点も体系的な研究はほとんど行われていなかった。本研究はこの欠落を埋め、言語教育の中に外国語教育を明確に位置づけるための重要な基礎作業となった。

上記のいずれの目的に照らしても、本研究の成果は学校教育における言語教育の在り方について示唆するところが多く、大きな社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In this study, a cognitive model was first constructed to capture knowledge of mother tongue, knowledge of foreign languages, meta-linguistic awareness related to mother tongue and meta-linguistic awareness related to foreign languages in a single framework. When we were to test the adequacy of the model, COVID-19 spread, and we were forced to conduct a reduced-scale survey instead of a large-scale school-based survey which had been originally planned.

It was suggested that the knowledge acquired in learning a foreign language may positively influence the development of meta-linguistic awareness related to mother tongue.

It should also be noted that efforts were made to clarify the social significance of the results of this study through regular meetings and exchanges of views with groups of teachers in primary, junior high and senior high schools.

研究分野：認知科学

キーワード：メタ言語能力 ことばへの気づき 母語 外国語 英語教育 国語教育 言語教育 認知科学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の大津はメタ言語能力/意識を活用した言語教育システムの開発に関してこれまでに以下5件の科学研究費を申請し、いずれも採択された。「日英語の分析を利用した科学教育の可能性を探る認知科学的研究」(2004-05、萌芽)、「言語知識とその獲得・運用機構を説明する言語機能モデルの構築と言語教育への応用」(2005-07、基盤B)、「メタ言語意識を基盤とする言語教育に関する理論的・実証的研究」(2008-10、挑戦的萌芽)、「メタ言語能力を活用した科学教育の可能性に関する研究」(2011-13、挑戦的萌芽)、「メタ言語能力の発達過程の解明とそれに対応した言語教育システムの開発」(2014-16、基盤C)。この一連の研究で、メタ言語能力の育成を目的とする言語教育を学校教育の中に導入することの意義を理論的・実証的に明らかにした。

この一連の研究で残されたのが外国語の知識が母語に関するメタ言語能力に影響を与えるか否かを明らかにするという課題と母語に関するメタ言語能力と外国語に関するメタ言語能力が共通の認知機構に根ざすものであるかを明らかにするという課題であった。

2. 研究の目的

本研究は互いに関連する2つの目的を持つ。

第一の目的は外国語の学習において身につけた知識が母語に関するメタ言語能力の発達に正の影響を与えるか否かを理論的・実証的に探ることである。

第二の目的は母語に関するメタ言語能力と外国語に関するメタ言語能力が共通の認知機構に根ざすものであるか否かを理論的・実証的に探ることである。

第一の目的に関して、外国語の知識が母語に関するメタ言語能力の発達に正の効果を与えることが実証できれば、認知科学的な意義が大きいだけでなく、外国語教育の意義とその在り方に重要な影響を与え、大きな社会的インパクトが期待できる。

第二の目的に関しては、その本質が捉えられていないメタ言語能力について新たな視点からメタ言語能力を検討することによってその本質を探る作業に新たな展開をもたらす可能性がある。

3. 研究の方法

(1) 母語の知識、外国語の知識、母語に関するメタ言語能力、外国語に関するメタ言語能力を関連させて捉えるための認知モデルを構築する。

(2) 英語の知識を測定するためのテストを開発する。読みだけに関する情報では十分ではないので、書く、聴く、話すに関する情報も利用し、被験者の英語知識を多角的に探る。被験者は小学生、中学生各50名、高校生、大学生各30名を予定している。

(3) 日本語に関するメタ言語能力を測定するためのテストを開発する。これまで大津が開発した、あいまい性(ambiguity)検知と文構造検知(全体としての文を構成する部分の同定と部分間の関係の認識)(大津・窪菌『ことばの力を育む』、2008、慶大出版会)に加えて、新たなタイプのテストを開発する。被験者は(2)と同一である。

(4) 日本語の運用能力を測定するためのテストを開発する。被験者は(2)と同一である。

(5) 英語に関するメタ言語能力を測定するためのテストを開発する。被験者は(2)のうち小学生を除いたグループである。

(6) (2)・(3)のテストを実施する。1年度には予備調査を、2年度目には本調査を、3年度目には追加調査を実施する。予備調査では、(2)・(3)のテストを同時に行い、英語の知識と日本語に関するメタ言語知識の間の相関関係を調査する。本調査では年度初めに(2)を、年度後半に(3)を同一被験者に対して実施し、英語の知識と日本語に関するメタ言語知識の間の因果関係を調査する。

(7) (4)のテストを実施する。2年度目には予備調査を、3年度目には本調査を実施する。(6)の結果と併せ、英語に関するメタ言語能力と日本語の運用能力の関係を明らかにする。

(8) (5)のテストを実施する。2年度目には予備調査を、3年度目には本調査を実施する。母語に関するメタ言語能力と外国語に関するメタ言語能力が共通の認知機構に根ざすものであるか否かを検討することによって、メタ言語能力の正体を探る。

(9) (6)・(7)・(8)の結果とその分析をもとに、(1)で構築したモデルの妥当性を検討する。必要であれば、モデルの修正を行う。

(10) モデルが言語教育に対して示唆する点を明確にし、具体的な改善提言をまとめる。

4. 研究成果

本研究においては、まず、母語の知識、外国語の知識、母語に関するメタ言語能力、外国語に関するメタ言語能力を関連させて捉えるための認知モデルを構築した。そのモデルの妥当性を検証するために必要なテストを作成した段階で、新型コロナウイルス感染症の拡大により、学校を単位とした大規模な調査が行えなくなった。結果として、規模を縮小した調査を行い、外国語の学習において身につけた知識が母語に関するメタ言語能力の発達に正の影響を与える可能性があることが示唆された。この結果を判断すると、当初予定していた大規模テスト実施の必要性は高いと考えられるので、新型コロナウイルス感染症の状況をみきわめた上、別途プロジェクトの一部として実施する予定でいる。

本研究は学校における英語教育、国語教育などにも重要な示唆を与え得るものであることから、小中高の教員グループとの定期的な会合を重ね、意見交換を行うことによって、本研究の成果の社会的意義を確実なものにする努力を重ねてきた。

本研究の成果の延長線上に位置づけられる、母語教育と外国語教育の一体化の可能性については今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大津由紀雄	4. 巻 -
2. 論文標題 名著解題：Carol Chomsky (1969) The acquisition of syntax in children from 5 to 10. MIT Press.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題	6. 最初と最後の頁 132-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大津由紀雄	4. 巻 61
2. 論文標題 指定討論：「小学校での英語学習はどのようにあるべきか」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 251-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大津由紀雄	4. 巻 913
2. 論文標題 小学校英語の進むべき道	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 71-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大津由紀雄	4. 巻 96
2. 論文標題 言語教育における小中接続のあるべき姿	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中央教育研究所研究報告	6. 最初と最後の頁 24-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大津由紀雄	4. 巻 8
2. 論文標題 書評：石居康男、兼原和生『日本語を活用して学ぶ英文法』神田外語大学出版局、2020年	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育	6. 最初と最後の頁 93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tang Long, Takahashi Toshimitsu, Shimada Tamami, Komachi Masayuki, Imanishi Noriko, Nishiyama Yuji, Iida Takashi, Otsu Yukio, Kitazawa Shigeru	4. 巻 31
2. 論文標題 Neural Correlates of Temporal Presentness in the Precuneus: A Cross-linguistic fMRI Study based on Speech Stimuli	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Cerebral Cortex	6. 最初と最後の頁 1538 ~ 1552
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/cercor/bhaa307	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 大津由紀雄、末岡敏明	4. 巻 1
2. 論文標題 認知科学者と英語教師のやりとり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学問的知見を英語教育に活かす	6. 最初と最後の頁 2-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 12件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 しりとりと「ことばへの気づき」の発達
3. 学会等名 第9回議論型研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 生徒の心に火をつける
3. 学会等名 ことばのまなび工房連続ワークショップ「英語の教室で何が出来るか」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 いまこそ、ことばの教育を目指そう
3. 学会等名 新英語教育研究会全国大会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 「ことばへの気づき」は言語教育にとってどんな意味を持つのか
3. 学会等名 関西大学外国語教育学会関西大学外国語教育学会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 母語の獲得と外国語の学習
3. 学会等名 新英語教育研究会関西支部学分会学習会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 英語教師が知っておきたい、言語学と認知科学
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会10月月例研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 英語教育を英語から解放しよう---日本型複言語主義のすすめ
3. 学会等名 英語教育ユニバーサルデザイン研究学会第3回研究大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 研究課題の見つけ方
3. 学会等名 中京大学国際学部特別講演（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 複言語主義的言語教育
3. 学会等名 第4回AI教育研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 言語心理学からの付録
3. 学会等名 東京言語研究所公開講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 複言語主義を考える
3. 学会等名 中京大学国際学部FDセミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 日本語で始める英語、英語で豊かにする日本語
3. 学会等名 宝仙学園父母会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 「ことばの教育」としての英語教育
3. 学会等名 第52回全道外国語教育研究集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大津由紀雄
2. 発表標題 大津由紀雄、大いに語る---ことばの認知科学、ことばと教育、そして、大学教育
3. 学会等名 本挑戦的研究(萌芽)公開講演会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 辻伸幸、上野舞斗、青田庄真、川口勇作、磯辺ゆかり、大津由紀雄、下絵津子、田邊祐司、久保田竜子、久保野雅史、三浦孝、鳥飼玖美子、斎藤兆史ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 482
3. 書名 英語教育の歴史に学び 現在を問い 未来を拓く	

1. 著者名 大津 由紀雄、亘理 陽一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 360
3. 書名 どうする、小学校英語？	

1. 著者名 大津 由紀雄、今西 典子、池内 正幸、水光 雅則、杉崎 鉦司、稲田 俊一郎、磯部 美和	4. 発行年 2022年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 368
3. 書名 言語研究の世界	

1. 著者名 大津 由紀雄	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 ワイド新版 英語学習7つの誤解	

1. 著者名 辻伸幸、上野舞斗、青田庄真、川口勇作、磯辺ゆかり、大津由紀雄ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 473
3. 書名 英語教育の歴史に学び 現在を問い 未来を拓く---江利川春雄教授退職記念論集	

1. 著者名 大津由紀雄ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 メタ言語能力を育む文法授業	

1. 著者名 大津由紀雄ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 376
3. 書名 言語接触: 英語化する日本語から考える「言語とはなにか」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果の一端は上記「ことばの教育」サイト内の「大津研ブログ」に掲載。
<https://www.kotoba1.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------